

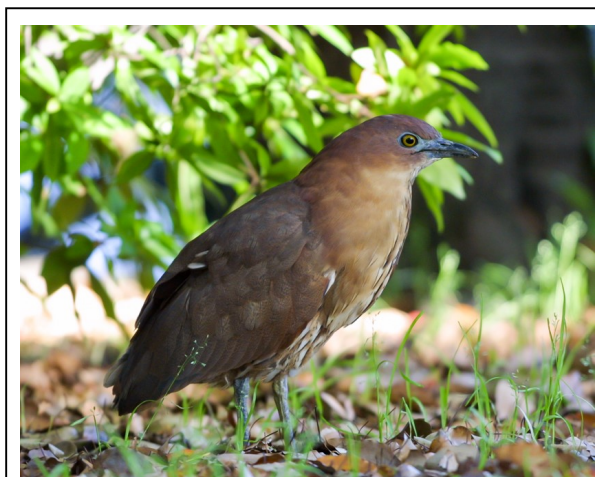
ミゾゴイ *Gorsachius gosisagi* (Temminck)

【選定理由】

繁殖期の分布が日本固有の夏鳥であり、丘陵地から標高 1,000m の山まで、広範囲に生息して繁殖するが、目につきにくいことから生息状況には不明な部分も多い。主に繁殖前期に確認される鳴き声から、生息数が少ないことに間違いはなく、繁殖期に比較的確認数の多い標高では、道路建設や開発などの問題が多く発生している。

【形態】

全長 49cm。上面は赤褐色、下面は淡黄褐色で黒褐色の縦斑がある。成鳥の頭上は黒褐色で、後頭に短い冠羽がある。嘴はサギ類としてはかなり短く、目の周囲と目先は水色。幼鳥は頭から体にかけて白色と黒色の虫食い斑がある。



愛知県名古屋市長古市, 2002年4月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏鳥として飛来して繁殖するが、県内では繁殖期に丘陵地から標高 1,000m の山地まで確認記録がある。渡りの時期には、平野部の都市公園に飛来することも少なくない。

【国内の分布】

主に本州、四国、九州、伊豆諸島で繁殖する。夏鳥であるが北海道では迷鳥であり、少数は国内でも越冬する。

【世界の分布】

日本で繁殖し、冬期は、南西諸島、台湾、中国南部、フィリピン、モルッカ諸島などで越冬するが、サハリンやパラオの記録もある。

【生息地の環境／生態的特性】

主に沢のある比較的暗い広葉樹林や針広混交林に生息し、二又の枝上などに営巣する。餌場としては落ち葉が厚く堆積した沢や湿地を好み、ここに多いミミズやサワガニ、昆虫などを捕食する。警戒時には、正面を向き嘴を上に向けて体を真っすぐ伸ばす独特な擬態を行う。繁殖期の夜間、高い樹上などに止まってポオーツ、ポオーツと低く太い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では丘陵地から 1,000m の山まで繁殖期の記録があるが、記録の大半は標高 100～500m 程度の範囲にある里山環境である。比較的確認数の多い地域でも毎年確認されることは希で、確認されない年の方が多い。以前は里山の道路を走行中にポツンと立っている姿をみることもあったが、近年はこうした道路にも走行する車の量が多くなって、こうした機会はほとんどなくなった。里山に手が入らなくなり、餌場となる湿地が藪化していることも減少の要因といえる。

【保全上の留意点】

日本の里山環境がこの種の生息環境であり、現在は U ターンや I ターンの人材が日本の農林業を復活しようという動きもある。日本本来の里山環境が再生されるよう、社会構造の変化が望まれる。道路の整備や開発などを行う場合には、これら野生生物の保全に十分配慮されるべきである。

【特記事項】

過去に愛知県における越冬記録はないと思われるが、2015 年度と 2016 年度の冬に名古屋市の公園で 1 羽の越冬が確認されている。広葉樹の林で、地表に落ち葉が厚く積もる環境であった。

【関連文献】

柿澤亮三・小海途銀次郎, 1999. 日本の野鳥 巣と卵図鑑, pp.24-25. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)